

難民医療支援や国際交流に深い関心 獨協医大の学生8人が学習

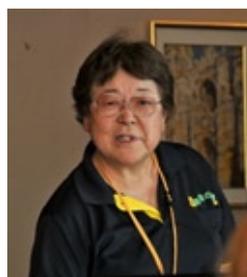
獨協医科大学医学部国際協力支援センター（大平修二センター長）の学生8人が13日に城西病院を訪れ、公益財団法人「茨城国際親善厚生財団（IIFP）」が長年行ってきた国際医療支援や国際交流について学びました。この講座は、同大学の公衆衛生学実習の一環として、「国際保健」や「母子保健」など14のテーマから学生が選んで学ぶ講座で、同病院には「国際保健」を選択した学生が訪れました。

アフガン支援を行ってきた通所リハビリセンター「茶釜の湯」の荒川邦江副理事長と、アフガニスタンの医師でIIFPの職員として活動するアマデアル・亜来春さんが講師となり、1982年から取り組んだインドシナ難民、エチオピア飢餓難民、アフガン難民の医療支援やゴールデントライアングル地域に位置するタイ北部への医療支援や国際交流などについてスライドを交えて解説しました。

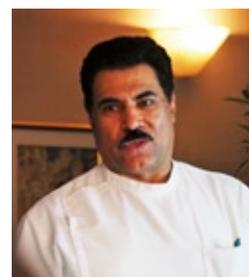
学生たちは、アフガニスタンのソ連侵攻や同時多発テロ以降のアフガニスタンの状況に興味を示して質問をし、「今まで知ることのなかった紛争地域の状況を聴くことができ、勉強になりました」と感想を述べていました。

学生たちは、城西健診センターなどの施設を見学。「とても病院と思えない」と話していました。天然温泉を使った温泉リハビリを行っている茶釜の湯も見学。利用者の様子を見たり、温泉プールを見学して、地域医療や地域福祉などにも関心を寄せていました。

平成30年6月16日



荒川邦江副理事長



アマデアル・亜来春さん

